

# 歴史館だより

財団法人最上義光歴史館 Vol.6 平成11年3月発行



山形城の秋景

## 歴史の教訓



山形郷土史研究協議会会長  
渡辺 信三

山形城址にたっている最上義光公の騎馬像は、戦国大名の英姿であるが私共にいろいろなことを教えてくれる。

戦国大名は中世から近世への転換期に当る一世紀の間に、激しい下剋上の風潮の中に生まれ、自らもまた領内の下剋上的な動向に対決しながら、領国という独立的王国を築きあげた。最上義光が本懐を遂げるまでは随分苦勞を続けたのである。だから領国の支配は当然戦国大名の権利であり、家臣に対しては忠誠を求め、領民には国役の義務を課したが、領内の開発と安全には大いに力をそそいだ。

慶長五年（1600）関ヶ原長谷堂合戦で勝利を得た義光は、五七万石の大々名になったが、その間に壮大な山形城を築き、城の南・東・北の三方に造った城下町は、現在の山形市の原型となった。馬見ヶ崎川扇状地に立地した町づくりはまことに見事である。今や山形市は駅西口を中心に、西方へ町づくりが待望されているとき、義光の構想と業績に学ぶべきものが多いと思う。

# 伊達政宗の母 義姫

仙台市教育委員会文化財課長 佐藤 憲一



伊達政宗の母義姫は、山形城主最

上義守の娘として天文十七年（一五四八）山形城に生まれた。最上義光の二歳年少の妹である。後に米沢城主伊達輝宗と結婚し、政宗をはじめ二男二女を生んだ。元和九年（一六二三）七月十六日、仙台で没している。享年七十六。法名は保春院。墓は仙台市青葉区北山の覚範寺にある。

## 勝気で行動的な性格

義姫は、ずいぶん気丈な人だったらしい。男勝りで、頭がよく、政治にも積極的にかかわる行動的な女性だった。こんな話がある。天正十六年（一五八八）伊達氏が最上・大崎の両氏と対立し、一触即発の状態になったときのこと。当時、政宗は郡

山（福島県）で常陸の佐竹氏、会津の芦名氏らと対陣中であり、現場に駆けつけることができなかった。これを見た義姫は、みずから最上、伊達両軍の間に輿で乗り込み、献身的なはたらきで両者を斡旋し、ついに和睦させている。

また、慶長五年（一六〇〇）長谷堂合戦のときには、山形城に迫り来る上杉勢を防ぐため兄の義光が政宗に援軍を乞うと、義姫も手紙をおくり、窮状を知らせて一時も早い救援を要請している。このとき義姫が政宗の叔父留守政景に宛てた手紙が残っている。上杉・最上両軍の配備と各地の戦闘、落城間近の緊迫した状況などを的確に知らせる内容で、とても女性のものとは思えない。政宗は上杉軍の籠もる白石城（宮城県）を攻略中であつたが、要請を受けてすぐに政景を総大将とする援軍を派遣。これにより力を盛り返した最上勢は上杉勢を撃退することができた。義姫の決断力、行動力がこの二例によってもうかがわれる。

## 政宗毒殺未遂事件

伊達政宗と母義姫。この母子について我々がもっとも知りたいと思うことは、例の毒殺未遂事件の真相だろう。わが子の膳に毒を盛るなどということが本当にあつたのか。

事件が起きたのは天正十八年（一五九〇）四月。伊達政宗が関白豊臣秀吉に謁見するため小田原（神奈川県）へ参陣する直前に起きた。場所は会津黒川城（後の会津若松城）。

事件の経緯は伊達家の正史『貞山公治家記録』〔元禄十六年〕一七〇三年〕に詳しい。四月五日、母の陣立ちの祝いの席に招かれた政宗は、母の用意したお膳に箸をつけたところ、たちまち腹痛を起す。急ぎ館にもどり投薬を受け、危うく一命をとりとめた。母が自分を毒殺しようとしたことにショックを受けた政宗は、母が溺愛する弟の小次郎に伊達家を継がせるために自分を殺そうとしたこと、その背後に母の実家最上家の陰謀があることを感じとり、同月七

日みずから弟の屋敷に赴き小次郎を手討ちにする。不憫だが、母を殺すわけにはいかない、というのが理由であつた。義姫はその晩、山形の最上氏のもとに逃げ帰った。以上が『貞山公治家記録』の記す事件の概要である。

このような義姫首謀説に対し、この事件は政宗が伊達家内部の弟擁立派を一掃するために仕組んだ一人芝居ではなかったか、とする説がある。作家の海音寺潮五郎はこの説をとる『武將列伝』。いったい真相はどうなのだろう。

私は、『貞山公治家記録』が記す義姫出奔の時期について、かねてから疑問をいだいてきた。『貞山公治家記録』は義姫出奔の日を、政宗が弟小次郎を手討ちにした四月七日としているが、はたしてそうだろうか。その後の二人の関係を追っていくと、どうも信じられない。例えば、この事件のあと、二人はたびたび手紙のやりとりをしている。伊達家文書のなかには、母に宛てた手紙が数多く残っているが、いずれも親子の濃やかな情愛を感じさせる内容で、事件のわだかまりをうかがわせるものはひとつもない。特に、事件から三年後、秀吉の命で朝鮮に出兵した政宗が、朝鮮での戦況を詳しく知らせた手紙には、母から送られた小遣いに対する率直なよろこびと感謝の気持が溢れており、「ぜひ無事に日本にも

どって、もう一度おあいしたい」と繰り返している。このような手紙が山形に逃げ帰った義姫との間でとりかわされるとは考えにくいことである。

### 新史料の発見と 事件の真相

私の長年の疑問は、五年前に発見された一通の古文書によって氷解した。それは文禄三年（一五九四）十一月二十七日、政宗の師である虎哉和尚が岩出山（宮城県）から京都にいた大有和尚に宛てた手紙である。大有和尚は政宗の大叔父。この手紙のなかで、虎哉は「政宗の北堂（母堂）が今月四日夜、最上に向かって出奔しました。お聞きおよびですか」と述べている。

この注目すべき史料の出現によって、母義姫の出奔は天正十八年四月七日ではなく文禄三年十一月四日であることが初めて明らかとなった。つまり『貞山公治家記録』の出奔の時期は誤りで、事件後義姫は政宗とともに黒川城から米沢を経て岩出山に移り、この年十一月四日まで岩出山にいたことになる。これで事件後も二人の間で頻繁な手紙の交換が可能だったことも理解できる。ちなみに伊達家文書に残る母宛の政宗の最後の手紙は文禄三年十一月二十五日、京都から出したもの。家臣の屋代勘解由に託されたこの手紙には、政宗

が京都であつらえた母への小袖が添えられていた。しかし、この手紙も小袖も母のもとに届くことはなかったはずである。

新しい史料によって義姫の出奔の時期が正されたいま、それ以外の事件の核心に係わる『貞山公治家記録』の記述も疑ってかかる必要がある。義姫が毒を盛ったとするなら、事件後も政宗のもとに居つづけ、手紙のやりとりをしていることは理解に苦しむ。『貞山公治家記録』は政宗が弟を手討ちにしたその晩に山形へ出奔したとして、義姫と背後の最上氏の事件への係わりを強く印象づけているが、そこに伊達家の正史としての作為は含まれていないだろうか。しかし、いずれにせよ四年後に義姫が岩出山から実家の山形に帰ったのは事実である。義姫はなぜ出奔したのか。

従来あまり注目されることのなかった史料だが、『貞山公治家記録』の記録のなかに、この謎をとく手掛かりとなる文書がはいっている。日付はないが、事件の直後、伊達政宗が側近（茂庭綱元か）に事件の経緯を知らせた手紙である。このなかで政宗は、お膳に毒を盛ったのは母と思われ、その背後に弟を擁立する勢力があること、このままでは伊達家内部が二分し内乱となるおそれがあるため、やむをえず弟を手討ちにしたこと、弟には罪がないが母を殺すわけ

にはゆかぬので、可愛そうだが殺さざるをえなかったこと等を詳しくうちあけている。そして最後に「このようなことは自分の口からは言えないのでそなたの方で斟酌して、よいと思うことは世間へくどき広めてほしい」と意味深長なことばで締めくくっている。おそらく、こうした政宗の意向が、政宗が岩出山をはなれ京都・朝鮮へ行っている留守に徐々に噂となって家中に広まり、周囲の疑惑の目に居たたまれなくなった義姫が山形へ出奔したというのが真相ではなからうか。

政宗毒殺未遂事件の全容は、まだ闇の中にある。しかし、義姫を事件の首謀者としてきた従来の見解は、『貞山公治家記録』の信憑性とあわせて見直されるべきだと思う。

### 母子の再会

山形と仙台、別れた二人が再会するのは二十八年後、元和八年十月のことである。最上氏の改易にともない、義姫は政宗のもとに身を寄せる。しかし、二人が仙台で一緒に暮らしたのは束の間。政宗のもとにもどつた十カ月後、義姫は黄泉へと旅立つ。晩年の義姫は足も不自由で、目も悪かったらしい。しかし、江戸にいる政宗夫人愛姫に手製の下げ袋を贈って感激させるなど、姑としての細やかな気配りを見せている。

再会した母子の間で交わされた贈答歌が、政宗の歌集に残されている。

○年月久しうへだたりける

母にあいて

あいあいて心のほどやたらちねの  
ゆくすえひさし千歳ふるとも

○母の返し

双葉より植えし小松のこだかくも  
枝をかかねていく千代のやど

義姫の生涯は、文字どおり伊達家と最上家の安泰を願って奔走した一生であった。この歌をみると伊達政宗の母としての誇りを終生持ちつづけた大したお母さんではなかったか、と思う。

### 佐藤憲一氏

一九四九年、宮城県に生まれる。  
東北大学文学部史学科卒。

専門、日本近世・近代史。

一九七一年、仙台市博物館に学芸員として勤務。

同館主幹兼学芸室長を経て、一九九七年四月から仙台市教育委員会文化財課長。仙台市史編さん専門委員。

「伊達政宗と家臣たち」（一九八七年）、「書に見る伊達政宗」（一九九五年）等の展覧会を担当する。

著書に『伊達政宗の手紙』（新潮選書）、共著に『図説伊達政宗』（河出書房新社）等。

# 平成10年度事業スナップ

10/24

## こども講座

「山形城と城下町をさぐる」



山形城主の変遷を勉強したあと、実際に山形城の三の丸跡や二の丸の濠を見て回りました。山形市小学校教育研究会社会科部会の先生方のご協力により濠の形や深さ、石垣の刻紋等を調べたり、寺町や専称寺の秘密を探りました。

6/29

## 姉妹都市からの来館

山形市の姉妹都市オーストラリアのスワンヒル市から二年に一度訪問する交換留学生のみなさん。今年も館を訪問し、山形の歴史と文化に触れていきました。異国の地YAMAGATAでの良い思い出になったことでしょう。



## 歴史講座

今年度は、中山町と天童市で行った移動講座、

## 特別企画展

展示資料から

紙本著色 紅花絵巻

一巻

東根市・武田陽氏蔵

本資料は横山華山筆の「紅花屏風」や青山永耕筆の「紅花屏風」と並び、本県を代表する紅花絵画の一つである。屏風とは異なり、卷子仕立てのため、栽培から花餅への加工、出荷までの一連の工程を、右から左に順を追ってみることが出来る。作業に従事する農民たちを生き生きとした表情で伸びやかに描き、過酷な紅花生産を素朴でユーモラスに表現している。また、紅花生産には特殊な道具を殆ど用いないので、当時の作業の様子や風俗を伝える貴重な資料といえる。



▲花摘み部分

特別企画展

「紅花と青芋と漆の国」

最上山形の名産品の中から代表的な紅花・青芋・漆の三つを取り上げ、その歴史や特色、商品として出荷されるまでの工程等を現資料や写真資料で紹介しました。特に青芋（カラムシ）は、身近にある植物でありながら、ほとんど忘れられていることに驚きました。



▲「戊辰戦争と山形」川瀬同先生



▲移動講座（天童）川崎利夫先生

代・中世・幕末をテーマにした講座の計三回の歴史講座を開催しました。どの講座も大変好評で、近年の歴史人気と郷土史への関心の高さを感じました。



▲にわか雨に、干していた花餅をあわてて運ぶ様子



▲花餅づくり部分

# 会沢金山遺跡

## 調査の趣旨

上山市大字狸森に最上義光の隠し金山伝承地がある。ここで採掘した金は山形城改修費となったという。現地は烏帽子山(標高627.3M)の南東面、標高600M付近の山地である。調査の趣旨は次のとおり。

- ① 鉾山の有無。
  - ② 鉾石には金を含むか。
  - ③ 年代的に最上義光または最上家との関係は認められるか。
- 以上を明らかにし、可能ならば中



世期末く江戸初期における全国的な鉾山開発ブームの山形地方における具体相を把握したい。

## 先行研究及び文献

地元住民の間に語り継がれた伝承であり、先行研究は今までのところ発見されていない。

関係文献としては、『郷土に立脚せる山元村教育』(昭和9年・山元小学校発行)に「会沢金山」の一項がある。以下はその要旨。

「酒田町の伝兵衛なる人物が、資産を失って流浪し、霊夢によって本沢川上流にいたり、この地に金山を発見した。以後この鉾山は盛んとなり、山形城築城の資となった。明治年間、坂本某が採掘を行なったが、後廃坑となる。約十年後、白土採掘が行なわれ、現今(注・昭和9年)も白土採掘がなされている。」

## 調査組織

平成9年6月、上山市山元郷土研究会、山形市本沢郷土研究会有志等25名による「会沢金山遺跡調査団」(团长川合勝太郎氏・副团长伊藤繁雄氏)が結成された。

最上義光歴史館においても、最上家関係史跡調査の一環として、会沢遺跡調査の必要があり、両者協力して調査に当たることとした。

専門的知見を有する指導者として、鉾床地質学者菊地俊彦氏(富澤学園理事)、考古学者茨木光裕氏(山形市文化財保護委員)を依頼。

調査結果を公開する意味で、山形テレビ田島義彦氏が参画した。

## 経過の概略

- ① 平成9年4月21日(月) 鉾山遺跡の確認
- ② 平成9年11月22日(土) 「タイトウ屋敷」の発掘調査
- ③ 平成10年8月13日(木) 会沢川土砂の成分調査

## 調査結果の概要

① 万年堂(山神)：鉾山上手の尾根にある荒削りの石造小祠。懸魚もある豪快な独特の形態。岩質は石英粗面岩。鉾山の母岩を利用したと推定される。「文久二歳 願主丹治」の陰刻から、造立年代は1863年と考えられるが、屋根や土台は陰刻のある胴部分よりも風化が進んでおり、年代はさらに遡る可能性がある。

② 坑口：確認できた坑口は5箇所。1箇所を除きすべて崩落し、坑内を見ることはできない。第5坑は坑内を10Mほど見通すことが可能。入坑できないためヒ押坑道か探鉱坑道かは不明。年代は不明。坑道加勢(規格)は、5尺×6尺だったろう(小笠原繁蔵氏談)と思われる。

③ 崩落坑道の渗出水PH値

No.1坑	4.5
No.2坑	3.7
No.5坑	3.5

舌による味覚も酸性を示す「渋さ」が顕著である。これは硫酸塩鉾物を胚胎する鉾床を地下水が通過したことを推定させ、鉾床はこの地域に多い「黒物鉾床」と思われる。なお、これが流下する川底には好酸性植物が繁茂しているが、種類は未確認。

## ④ 周辺の鉾山関連遺跡・遺物等

(a)ズリ山：坑口を扇の要として広範囲に広がっている。ズリの量から、鉾山最盛期は相当多数の労務者が作業に従事していたと推定される。

(b)鉾滓：ズリ山の一部に見られ、精練も行なわれたことを示す。

溶鉾炉、精練所跡地は不明。

(c)タイトウ屋敷(地名)：山中の平地で、発掘の結果、室町時代のかわけ片を検出。飲料水確保が可能な場所であり、労務者の住居跡と推定される。

(d)会沢川の土砂：極めて微量の砂金を検出。金鉾脈の存在、昭和初期に砂金採取をしたとの言い伝えを証拠だてるものと思われる。他に石英、オパール、黄銅鉾、黄鉄鉾が存在し、上流に鉾脈が存在することを裏付ける。

(e)鉾石粉砕用石臼：長橋栄次氏ほか所蔵。鉾山跡地から運んできたもの。石質は花崗閃緑岩。年代は現段階では未確認である。

## 結び

会沢鉾山は存在した。金が採掘された可能性も否定はできない。年代は室町期に遡る。したがって、最上家によって採掘されたとしても矛盾はないが、積極的に証明するには到らない。

タイトウ屋敷、十分一、丑万淵、千丁金などの地を詳細に調査し、地元の古文書などを探索して、史実を確定することが今後の課題である。

駒姫物語

山形大学附属小学校教諭 花輪千秋

トントントンカラ  
トンカラリン  
トンカラ霞城のお姫様  
赤いべべ着て 紅つけて  
お船に乗って 行っちゃった

戦国時代、権力闘争の渦のなかで、十五才という短い生涯を閉じた「駒姫」。その散り行く姿は、四百年を過ぎた今も『悲話』として語り継がれている。  
駒姫はどのような思いで京へ旅立っ

て行ったのだろうか。もし、私が駒姫だったら……

きれいごとではないが、駒姫はきつと自らが置かれた立場を無念と思いつながら山形の平和を願いながら故郷をあとにしたのかもしれない。

「駒姫の思いを何とか子どもたちに感じ取らせたい。」

こんな強い思いを抱きながら「山形の平和を願いながら京へ旅立つ駒姫」をテーマにした『駒姫物語』を創作した。

劇や歌、合唱、演奏、ダンスや舞などで表現することによって駒姫の思いを、その子なりに感じ取ってもらえることを願って……

創作活動に入った子どもたちが一番こだわったのは、父義光の平和を獲得するための戦いと、その戦いのために苦しむ民衆との狭間で、駒姫が、何が山形の平和につながるかを考える場面であった。

戦いに対する駒姫の憤りが、義光の山形を想う気持ちを知らず知らずのうちに、どうすれば山形は本当に平和になるのか。

子どもたちは、自分の役になりきって表現する中で、次第にイメージを膨らませながら豊かに創作していったのである。

この世で美しいもの  
それは、夜空に輝く満天の星  
それは、野に咲く一輪の花  
それは、平和を願う人の愛

駒姫役のあすみさんが、目に涙を浮かべながら、駒姫の思いを歌った。百二十五名すべての子どもたちが純粹に駒姫の思いを感じ取り、素直に表現してくれたことが、そして、私が思い描いた以上の姿を見せてくれたことが何よりもうれしかった。

俳句

父祖の地

みちのくの名産届く年の暮  
父祖の地の出羽三山や除夜の鐘  
出羽の山歴史をつつむ春の雨  
膝掛やおくに自慢の紅の柄  
躑躅に山茶花一ひら京の庭

最上家第四十七代当主令夫人  
最上勢津子  
(昨年NHKのテレビで放映される)  
(昨年春、雨の中を参詣する)  
(山形グランドホテルで購入する)  
(京都北野天満宮前の茶処)



山形城二の丸東大手門初春



市民会館での講演を終えた数日後、イチヨウの葉が金色に輝く晩秋、専称寺「御殿堰」の傍らで静かに眠る駒姫の墓地を訪ねた。  
墓がとてもきれいだった。  
愛らしく添えられた野の花に、駒姫のやさしい微笑みを感じた。駒姫を語る事実は決して多くはないが、駒姫の生き様を思い描きながら伝えるて行きたいと思う。

# 平成11年度の計画

最上義光歴史館が創設されてから今年10年目に当たります。

山形を築き上げた英傑、最上義光をより多くの方から知っていただくために、努力を怠りませんでしたが、今年も最上義光が山形の領主としてなした数々の業績や、その人となりをいっそうわかりやすく、親しみやすいように、資料の収集や展示に配慮してまいります。

より以上のあたためたいご支援ご指導をお願いいたします。

## 開館10周年記念展 最上時代の美術から (仮題)

南北朝時代の延文元年(一三五六)から元和八年(一六二二)まで、二六七年のあいだ、最上家は山形を治めてきました。この時代(南北朝、室町、戦国乱世、桃山江戸初期)に生み出され、現に山形に残された美術品のなかから、各所蔵者のご協力を得て展示公開します。

## 歴史講座

山形の歴史に関する学習会です。最近の研究や発掘の成果を中心に、興味深いテーマを設定して、専門家からわかりやすく解説していただきます。生涯学習のプログラムにお組み入れください。詳細は後日「広報やまがた」などでお知らせします。

## 子ども講座

小学生を対象とする「ふるさと学習」で、山形市内の小学校の先生方のご指導をいただいで開催する予定です。

時期については、追って「広報やまがた」やチラシでお知らせします。

## 最上家関係資料史跡調査

最上家に関する資料は、広く全国に散在しておりますが、それらについて一層研究を進め、また、最上時代の未調査遺跡等についても調査を行なってまいります。

特に来年の出羽合戦四〇〇年記念の年にそなえて、その経過などを、正確に詳細に調査します。

《ご協力をお願い》  
最上家にかかわる資料等をお持ちの方、ご存じの方、ご一報ください。

※最上時代の歴史や文化を明らかにするための資料を探しております。今後の研究のために役立てたいと思っております。よろしくご協力ください。

## 連絡先

財団法人最上義光歴史館

〒990-0046

山形市大手町1-53

☎023-625-7101

FAX 023-625-7102

## 新収蔵品の紹介

協指 銘 備前国住長船祐定作  
天文六年八月日 一口

白鞘  
鞘書「備前長船作 最上出羽守 依頼富士山二大護摩修業之折護 摩刀として得之云々」

平成十一年三月に山形市が購入し、当館に収蔵されました。

協指は天文六年(一五三七)義光が生まれる九年前)に備前国(岡山県)の長船派の刀工祐定によって鍛えられたものです。注目すべきは、刀の保存用につ

くられた白鞘に前記のような鞘書が記されていることです。「最上出羽守」とはもちろん義光のこと。内容は「義光が行わせた富士山大護摩修業のときに護摩刀としてこれを得た」とあります。これまで義光と富士山大護摩修業についての記録は見つかっていないので、義光の信仰生活の一端を明らかにする貴重な資料といえます。

写真：鞘書部分

# 平成10年度のあゆみ

- 4月4日 小中学生、土曜日入館無料開始。
- 4月25日 最上家当主、最上公義氏夫妻来館。
- 5月26日 平成10年度第1回理事会・評議員会(27日まで滞在)
- 6月29日 スワンヒル市留学生来館見学 第2回理事会
- 7月19日 山形市制109周年記念無料開館(入館者253名)
- 7月25日 「歴史セミナー：なかやま」開催。於・中山町中央公民館 講師・横山昭男氏、(川崎利夫氏)(参加者50名)
- 8月21日 作家安西篤子氏、取材のため来館。
- 8月27日 平成10年度第1回運営懇談会
- 9月5日 「歴史セミナー：てんどう」開催。於・天童市総合福祉センター 講師・横山昭男氏、川崎利夫氏(参加者56名)
- 10月10日 特別企画展開展 「紅花と青芋と漆の国」 最上山形の歴史と特産 義光祭 於光禪寺
- 10月16日 ことも講座「山形城と城下町をめぐる」(参加者19名)
- 11月3日 文化の日 無料開館(入館者298名)
- 11月12日 資料整備検討委員会(検討資料、最上出羽守関係護摩刀1口) 特別企画展開展
- 11月15日 自主防災訓練(入館者3093名)
- 11月27日 市文化施設勤務者研修会
- 11月30日 歴史講座「最上義光の連歌を写して読もう」(参加者14名)
- 1月15日 第2回評議員会、第3回理事会 於・中央公民館。講師 伊藤清郎氏 川瀬同氏、茨木光裕氏(参加者 毎回 102名)
- 2月2日 第3回評議員会、第4回理事会
- 3月26日

## ご利用について

- 開館時間 ●午前9:00から午後4:30
  - 入館料 ●一般大人300円、高校生200円 (小中学生100円、土曜日無料) 団体大人240円、高校生160円 小・中学生500円
  - 休館日 ●月曜日(国の祝日の場合はその日の前日)
  - 交 通 ●JR山形駅より徒歩約10分 大手町バス停留所より徒歩1分
- 山形市大手町1-53 TEL 023-625-7101 FAX 023-625-7102